

文字は廣義
に於ける言
語

言語の文字
に優る点

一七 文字の種類と系統

一 文字の種類

言語とは普通には吾人の思想を音聲によつて表現したものの意義に用ひられて居る。即ち言語なるものは音聲によつて表現せられたものでなければならぬやうに考へられて居る。併しながら吾人の思想を外部に發表し得るには音聲の外、尙ほ文字(此の外身振等もある)の存することを忘れてはならぬ。此の点から見て、文字なるものも廣義の言語と稱することが出来る。

言語と文字とは何れも思想發表の重要な手段ではあるが、其の效力に至つては雙方とも夫々の特質がある。例へば(一)言語は抑揚音調等の力により喜怒哀樂の情を表はし、人を強く感動せしむることを得るが、文字にありては言語の如く直接に之を行ふこと能はず、(二)言語は暗所に於ても意志を通することが出来る

文字の言語
に優る点

が、文字にありては全く之を缺くやうなことは、言語の文字に優れる点であり、又
(一) 言語は發聲の後直ちに消滅してしまふが、文字によつて認められたものは永
く後世に傳へることが出來、(二) 言語は其の達し得る距離に制限があるけれども、
文字は遠隔の地に之を傳へることが出來るなどは、文字の言語に優れる点であ
る。

文字發生の
動機

結繩文字

さて文字發生の動機は如何なる點に起源するかといふに、最初は單に或る事
柄を或る記號の下に記し止めるといふことに存した。即ち言語のみありて文字
を有せざりし民族が、後日の記憶に備ふるため、或る記號を案出し、之に自己の考
を托するといふことに起源するのである。繩の色又は結目の數等によつて或る
意味をあらはす所謂結繩文字の如き、色を異にせる貝殻を絲に貫いて夫々の意
味を托する一種の符號の如きは、即ち此の種に屬するのである。而して此等の符
號は固より嚴格なる意味に於ける文字と稱することを得ぬのであるが、此等が
漸次固定的のものとなり、使用の度が重なるに従つて、狹義に於ける文字に進む
ことになるのである。今次に文字の種類を簡略に説明する。

(一) 意字 (Ideographic) 文字其のものに意義あるものをいふ。これは更に象形文字、

繪畫文字の二に分つことが出来る。

(イ) 象形文字 事物の形態を象つたもので、漢字六書中の象形の如も之に屬する。

即ち漢字の日月山川の如きは何れも象形文字で、其の源を 、、、 等の形に發して居る。

(ロ) 繪畫文字 (Pictorial) 象形文字は事物の形態によつて作られるものである

が、形態無きものは形として直ちに之を文字の上に表はすことが出来ぬ。かゝるものに對しては特に夫々の意義を寓した文字を作る。漢字六書の一たる指事の如きは之に屬する。即ち「うへ」の義を表はすには、横線の上方に點を施した「上」を用ひ「した」の義を表はすには、横線の下方に點を附した「下」を用ふるが如きこれである。

(二) 音字 意字の如く文字其のものに意義あるものでなく、單に或る音を表はす符號として用ひられた文字をいふのである。これは語字、音節文字、單音文字の三種に分つことが出来る。

(イ) 語字。漢字の或るものは象形又は繪畫文字に起源することは、既に前にも述べた通りであるが、漢字なるものは又一語が原則として一箇の音節から成り立つといふことを標準として見る時は、一音節即ち語であるから、之を音字中の語字と稱することが出来る。假名や羅馬字は一音節が其のまゝで一語を成すことは出来ぬ。

(ロ) 音節文字 (Syllabic) 國語の假名の如く、一字が一音節を成して居るものをいふ。例へば「ら」なる假名文字は (a) 語字の如く文字自身にて完全なる意義を有する一語を形成することなく、又 (b) 次に述ぶる單音文字の如く單一なる音を表はすものでもない。尙ほ此の點を稍々委しく説明すると、

(a) 一字一語にあらざること。「か」(蚊)、「き」(木)、「た」(田)、「ち」(血)、「な」(名)、「に」(荷)は

(葉)、「ひ」(火)等は、一字にて一語を形成して居るので、一見語字の如くにも考へられるが、それは只偶然的の出來事で、假名なる文字の總てに通じて居る共有的の特質ではない。其の證據には、假名中の「ら」行の文字などは其の各箇に何等の意義が含まることなく、又意義ありと考へらるゝ「か」(蚊)と「き」(木)

とを結合して「かき」とするも、其の概念は「蚊」と「木」どの結合せられたるものにあらすして、却つて之と關係なき「柿」「垣」「牡蠣」等の概忽を表はすこととなる事實に徴しても、明かであらう。

(b) 單音文字にあらざる、こと。内地の國學者は古くから假名を以て一箇づつの音を表はす文字と考へて居た。勿論、あ行の文字の如きは母音、其のものを表はす性質上、明かに單音文字をなして居るが、か行以下わ行に至る諸字は決して單音ではなく、原則として複音から成り立つて居る。即ち「か」(ka)はkとaとに、「き」(ki)はkとiとに、「く」(ku)はkとuとに分解することが出来るのである。「さ」行以下皆同じ。從來の音韻學者が「かをく、あの約音「し」を「す、い」の約音とするが如きも、此の間の消息を説明せんとしたものである。「あ」行以外の假名の單音文字にあらざることば上に述べた通りであるが、「か」行以下の文字にありてもあります「す」などは、今日の話し言葉に於ては單なるsの一音に發音せられ、のの複音にあらず、「又「ん」の如きも、かん」とん等の如く、他の音と結合して發音せらるゝ場合には、nを表はす單音文字

に過ぎざること深く注意せねばならぬ。

音節文字の適例は、上述の如く我が假名に於て發見することが出来るが、
 アッシリヤの楔形文字、朝鮮に於ける漢字畧體の吐尼（トニ）の略たるヒ（ヒ）、古の略
 たる口（コ）、也（エ）の略たるフ（フ）の如きもの（本畫漢字畧體の吐ニも之に屬する）の如きものである。

單音文字

(ハ) 單音文字 (Phonetic) 羅馬字の如く一字一音を表はすものをいふ。音節文字は尙

ほ之を二箇以上の音分子に分つことが出来るが、單音文字は a, t, m, n に於ける
 a, t, m, n 等の如く、音としては分解し得る最小限のものたることを意味す
 るのである。朝鮮の諺文の如きも此の單音文字に屬するものである。但し中
 には英語の sh, th, ph 等の如く、二字を以て書き表はされても、其の實際の音價
 に於ては一箇の子音に等しいものもある。斯の場合に於ては一字一音
 なる定義は餘程曖昧になるが、それは丁度假名が原則として音節文字であ
 るのに、時として單音文字の交り入ることあると同じく、單音文字は原則とし
 て一字一音たる性質を固守して居るのである。

二 文字の系統

以上は主として文字の形音義の上から之が分類を試みたのであるが、尙ほ此の外に文字傳播の經路を眼目として系統的觀察をなすことが出来る。

太古以來今日に至るまで、吾人の記録上に於て認め得る世界に於ける文字の總數は二百餘種に及ぶべく、其中現在使用せられて居るものは僅かに十餘種に過ぎぬ。而して此等多數の文字は何れも箇々別々の起源を有したものであらうか。或は之を幾箇かの少數なる根源に歸納することが出来るものであらうか。此の點に關しては古來學者の間に種々なる論議が試みられた。併しながら第十八九世紀以來有力なる文字學上の資料が各處に發見せらるゝあり、一方言語學の異常なる進歩に伴ひ、文字に關する智識は著しき發達を遂げ、其の系統の如きも略々明かにするを得るに至つた。今普通の說に従つて世界の諸文字を分類すると、支那、埃及、アッシリヤの三とすることが出来る。

(一) 支那系統の文字 源流を漢字に發したもので、西夏文字、宋の頃支那甘肅省地方にありし西夏國の文字、契丹文字、唐の末蒙古の東方に起りし契丹即ち遼の文

埃及文字

字、女眞文字（宋の頃滿洲地方より起りし女眞即ち金の文字等は之に屬する。又我が國の片假名平假名朝鮮に於ける漢字略體の吐の如きも之に屬するものである。）
(二) 埃及文字。源流を埃及の象形文字に發したものをいふ。埃及の象形文字は今より凡そ七千年前の創作にかゝり、今日多くは金字塔^{ピラミッド}其の他墓碑等に銘せられてあるのを見ることが出来る。此の文字が古くセム^{セム}チツク^{チツク}人に傳へられて、フェニシヤ文字を形成し、フェニシヤ文字は更に三大分派をなし、

(1) は希臘文字より羅甸文字、英吉利文字、獨逸文字、露西亞文字等を派生し、

(2) はアラメヤ文字よりヘブライ文字、アラビヤ文字、土耳其文字、波斯文字、回鶻文字、蒙古文字、滿洲文字等を派生し、

(3) は古代印度文字より梵字、暹羅文字、緬甸文字、ヒンデ文字、西藏文字等を派生し、

世界中最も廣大なる分布を有して居る。朝鮮の諺文は古來學者によつて古篆、梵字、蒙古文字など種々なる起源説が唱へられて居るが、埃及文字の系統を引いたものであることだけは明白である。

アツシ
文字

(三) ア○ ツ○ シ○ リ○ ヤ○ 文○ 字○
アツシリヤ地方に起つたもので、所謂楔形文字はこれである。其の分布の範圍は頗る狭小であるが、此の文字が古代文化の研究に多大なる光明を投じたことは、頗る顯著なる事實とせられて居る。